

飛翔 Hisho



《大地の泉／Sprouting of the Earth》浅井 裕介

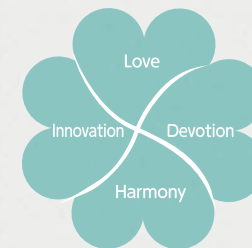


Love Devotion Harmony Innovation
2026.Summer
VOL.46

あさかホスピタルグループのクレド



心の声に、耳を澄まそう



困っているだれかの隣で
だれかが自然に手を差し伸べているような
思いやりにあふれたゴールをめざす
これは、わたしたちの物語です

基本理念：Fundamental Philosophy

愛情	Love	和	Harmony
温かい思いやりを持って、態度・言葉に配慮して、忍耐強く相手の心に耳を傾けること。人の心の痛みを理解できる人間になるよう努力していく。		職員同士のチームワーク、楽しい職場づくりを考えよう。職務を通して人間性を高め、協調性を保ち、患者さんに良い医療で奉仕する。	
奉仕	Devotion	進歩	Innovation
家庭、社会、職場の生活、全てに奉仕の心を忘れないこと。相手によって自分が活かされていることを感謝し、相手から感謝されることを期待してはならない。		常に創意工夫を心掛け、仕事を通じて自己の人間性の進歩を実現する。自ら勇気と向上心をもって、積極的により良い職務を求めていく。	

Hospital Principle

あさかホスピタルは基本理念のもと、心と脳の専門機関としてすべての人の心と人格を尊び、質の高い心のこもった医療・保健・福祉を提供します。

社会医療法人あさかホスピタル

- あさかホスピタル**
〒963-0198 郡山市安積町笹川字経垣45 TEL.024-945-1701(代) FAX.024-945-1735
- 地域総合サポートセンターコムニタ(あさかホスピタル内)**
 - ウエル居宅介護支援事業所
 - ウエル訪問看護ステーション
 - ウエル訪問看護ステーションサテライトみはる
 - 安積地域包括支援センター
 - 福祉まるごと相談窓口
- 〒963-0198 郡山市安積町笹川字経垣45
TEL.024-946-0581 FAX.024-946-0591(ウエル居宅介護支援事業所)
TEL.024-946-0582 FAX.024-946-0591(ウエル訪問看護ステーション)
TEL.024-946-9088 FAX.024-946-9089(安積地域包括支援センター)
TEL.024-945-2778 FAX.024-946-9089(福祉まるごと相談窓口)
- 介護老人保健施設 啓寿園**
〒963-0102 郡山市安積町笹川字経垣31 TEL.024-946-6145(代) FAX.024-937-3156
- あさかこころクリニック**
〒963-8024 郡山市朝日3丁目5-16 イルチェントロあさかビル 3F
TEL.024-927-5860 FAX.024-927-5861

社会福祉法人 安積福祉会

- 特別養護老人ホーム カーサ・ミツル**
〒963-0102 福島県郡山市安積町笹川字西宿77 TEL.024-946-2818 FAX.024-946-8170
- 特別養護老人ホーム しらさわ有寿園**
〒969-1205 福島県本宮市和田字戸ノ内158番地3 TEL.0243-64-2121 FAX.0243-64-2788
- 特別養護老人ホーム カーサ・コリーナ**
〒969-1205 福島県本宮市和田字戸ノ内158番地3 TEL.0243-24-5777 FAX.0243-64-2788
- 介護付有料老人ホーム カーサ・ヴェッキオ**
〒963-0102 郡山市安積町笹川字荒池下3番41 TEL.024-937-2227 FAX.024-937-2228
- 本宮市白沢地域包括支援センター**
〒969-1205 福島県本宮市和田字戸ノ内321 TEL.0243-24-5131 FAX.0243-24-5254

社会福祉法人 安積愛育園

- 総合児童発達支援センター アルバ**
 - 入所支援事業所 アルバ
 - 通所支援事業所 チェロ
 - 相談支援事業所 エッコ
- 〒963-0102 郡山市安積町笹川字経垣52 TEL.024-945-0369(代) FAX.024-945-0379
チェロ TEL.024-953-4436 エッコ TEL.024-937-2195
- 放課後等デイサービス 安積愛育園 パローネ**
〒963-8835 郡山市小原田3-11-11 TEL.024-944-5536 FAX.024-973-8250
- こどものひろば プリモ**
〒969-3133 耶麻郡猪苗代町大字千代田字前田甲311-1 TEL.0242-85-7320 FAX.0242-85-7321

- 障がい者支援施設 あさかあすなろ荘**
グループホーム カルモ
〒963-0103 郡山市安積町大森町70-1 TEL.024-947-7575 FAX.024-947-7576
- コミュニティサポートセンター アルベロベッコ**
通所事業所 ビッコラ グループホーム モンティ
郡山市障がい者地域生活支援拠点事業
〒963-0102 福島県郡山市安積町笹川字関谷田 3-6
TEL.024-953-5801(ビッコラ)/024-953-5422(モンティ)/070-1471-4237(拠点事業直通)
FAX.024-953-5802(共通)
- 地域生活サポートセンター パッソ**
〒963-0102 郡山市安積町笹川字四角垣54-3 TEL.024-937-0201 FAX.024-947-5115
- 多機能支援センター ビーボ**
〒969-1205 本宮市和田字戸ノ内321 TEL.0243-64-2151 FAX.0243-64-2152
- はじまりの美術館**
〒969-3122 耶麻郡猪苗代町字新町4873 TEL/FAX.0242-62-3454
- キッズスタジオPORTA**
〒963-0117 郡山市安積町荒井3丁目348番地 TEL.080-4292-6287

認定NPO法人 アイ・キャン

- Ariete「アリエテ」**
 - 指定相談支援事業所 コンサル
 - 地域活動支援センター アイ・キャン
 - 多機能型支援事業所 コラッジョ
 - 共同生活援助事業 ビータ
- 〒963-0107 郡山市安積4-3-1 TEL.024-945-1100 FAX.024-945-1129
- パン工房 ブォーノブォーノ 安積店
〒963-0107 郡山市安積4-3-1 TEL.024-983-5831
- bread & cafe ブォーノブォーノチェントロ
〒963-8024 郡山市朝日 3-5-16-1F TEL.024-927-5685 FAX.024-927-5686
- 就労継続支援B型事業所 みはる工房**
〒963-7712 田村郡三春町大字案内字孝戸71-1 TEL.0247-62-2801 FAX.0247-73-8565
- 就労支援事業所 coraggio**
〒963-8024 郡山市朝日3-5-16 1F TEL.024-945-1130

提携機関

- 有限会社アサカサービスセンター**
〒963-0102 郡山市安積町笹川字経垣45 TEL.024-945-2713 FAX.024-945-8883
- イルチェントロあさかビル**
 - あさかストレスケアセンター EAP相談室Lavoro カウンセリングルームComfort
- 〒963-8024 郡山市朝日3-5-16-2F TEL.024-927-5081 FAX.024-927-5082
E-mail.info@asaka.cc TEL.024-927-5210(Comfort)
- Kふぁーむ**
〒969-1205 本宮市和田字戸ノ内158-1 TEL/FAX.0243-44-1411
- リストランテトレンデビアンコ
〒969-1205 本宮市和田字戸ノ内158-8 TEL.0243-44-1020 FAX.0243-24-8559
- ふぁーむ デル・ソーレ(太陽光発電)**

大地の泉
Sprouting of the Earth

作家
紹介
浅井 裕介
ASAI Yusuke



2023年制作
あさかホスピタルグループ27箇所の土、作家蔵の日本各地の土、墨、弁柄、アートグルー、アクリルレジン、水

1981年東京都生まれ。マスキングテープとペンで物を描く「マスキングプラント」、現地で採取した土と水を使って描く「泥絵」シリーズなど、屋内外のさまざまな場所に、身近な素材を用いた作品を制作している。

2026年8月発行 Vol.46

発行／社会医療法人 あさかホスピタル 編集／事業企画室 〒963-0198 福島県郡山市安積町笹川字経垣45 TEL.024-945-1778

心と社会

社会医療法人あさかホスピタル 理事長 佐久間 啓

本年6月、第122回日本精神神経学会学術総会が、当院の水野雅文院長を大会長として開催されました。「社会の中の精神医療、社会を変える精神医学」をテーマに、多くの関係者のご尽力により、大変充実した学術総会となり、成功裡に終えることができたこと、を心から嬉しく思います。

近年、「メンタルヘルス」という言葉は、学校でも、職場でも、地域社会でも、ごく当たり前に使われるようになりました。しかしその一方で、メンタルヘルス不調によつて休職や退職を余儀なくされる方は増え続け、10代の自殺者数も増加傾向にあります。福島県は全国でも自殺率が高い地域の一つであり、深刻な課題を抱えています。

当院でも、この10年ほどは初診患者の中で10代が最も多くなっています。うつ病や適応障害、発達症など、さまざまな症状や生きづらさを抱えた子どもや若者が受診されています。必要な時に相談し、適切な治療や支援を受けながら困難を乗り越えていくことは極めて重要です。しかし、私がより深刻な問題だと感じているのは、本来、脳や心が大きく育まれる時期に、多くの子どもたちがさまざまなトラウマ（心的外傷）を抱えながら生きているという現実です。

近年では、多くの人が何らかのトラウマ体験を抱えていることが指摘されています。メンタルヘルスを考えるうえでトラウマを抜きに語ることはできません。目の前にある症状だけを見るのではなく、その背景にどのような体験があり、どのような苦しみを抱えてきたのかを理解しようとする姿勢が、これからの精神医療にはますます求められています。

認知行動療法の第一人者であり、日本ポジティブサイコロジ―医学会理事長でもある大野裕先生が監訳された『ポジティブ精神医学』には、トラウマからの回復にはレジリエンス（回復する力）が重要であり、その力は個人の資質だけではなく、周囲の人々とのつながりや支援によつて育まれることが記されています。子どもの頃から「自分は大切にされている」

と感じられる安心感、人を信頼できる経験、自分の役割を持ち、人の役に立てるといふ実感は、人生を支えるしなやかなレジリエンスにつながっていくのではないのでしょうか。

日本の子どもたちは身体的には世界でも恵まれた環境にあります。しかし、その一方で、心の幸福感は決して高いとはいえません。また、大人においても、幸福感を感じている人が少ないことが国際的な調査で繰り返し示されています。日本は、いつから幸福感を感じにくい国になってしまったのでしょうか。

家庭のあり方は多様化し、学校や職場を取り巻く環境も大きく変化しています。さらにITやAIの急速な進歩は、子どもたちの生活や人との関わり方にも大きな影響を与えています。こうした時代だからこそ、子どもたちの心がどのように育まれ、脳の発達にどのような影響が及んでいるのかを丁寧に見つける必要があります。そして、人々の心の健康と幸福のために、私たちの社会は何を大切にすべきなのかを、改めて考えなければなりません。

時代がどれほど変化しても、人と人との触れ合い、共感、温かく受け止めてもらえる安心感は、人の心を育み、希望や回復を支える最も大切な基盤です。

精神医療は、病気を治療する医療であるだけではありません。人と人とのつながりを育み、人と社会とのつながりを回復し、一人ひとりがその人らしく生きることを支える医療でもあります。

あさかホスピタルグループは、これからも地域の皆さまにとつて「安心して戻ることのできる基地」であり続け、そして医療・福祉・教育・地域社会とのつながりを大切にしながら、一人ひとりの心が健やかに育まれ、誰もが希望と幸福を実感できる社会づくりに貢献していきたいと考えます。それが、「社会の中の精神医療、社会を変える精神医学」の実践であり、私たちあさかホスピタルグループが目指す地域共生社会の実現につながるかと信じています。



第122回 日本精神神経学会学術総会

The 122nd Annual Meeting of the Japanese Society of Psychiatry and Neurology

第122回日本精神神経学会学術総会



社会の中の精神医療、社会を変える精神医学

社会医療法人あさかホスピタル 院長 水野 雅文

第122回日本精神神経学会学術総会を、2026年6月18日から20日までの3日間、パシフィコ横浜ノースにおいて開催しました。全国から約9,000名の参加登録をいただき、海外からの招待講演者をはじめ、多くの精神科医療・保健・福祉・教育関係者が集い、活発な議論と交流が行われました。開催にあたり、ご支援をいただいた関係者の皆さま、とりわけあさかホスピタルグループ職員の皆さま、そして「はじまりの美術館」の特別展示にご協力いただいた作家・関係者の皆さまに、心より感謝申し上げます。

本総会では、「社会の中の精神医療、社会を変える精神医学 (Psychiatry in Society, Psychiatry for Society)」をテーマに掲げました。精神医学は、人のこころを対象とする医学ですが、そのこころは決して社会から切り離されて存在するものではありません。戦争や災害、経済格差、孤立、情報化の進展、価値観の多様化など、社会の変化は人々のこころに大きな影響を及ぼします。一方で、精神医学はそうした社会の課題を受け止めるだけでなく、人々の生き方や地域のあり方、さらには社会そのものに働きかける力を持っています。そのような思いを、このテーマに込めました。

3日間の学会では、最新の脳科学や薬物療法に関する研究はもちろん、地域精神医療、子ども・若者支援、高齢者医療、多職種連携、当事者・家族との協働、災害精神医療、教育・文化・芸術との連携など、多彩なテーマが議論されました。また、「精神医療の価値を可視化する」と題した会長企画では、行政、医療界、学会などさまざまな立場の方々が一堂に会し、精神医療が社会に果たしている役割や、その価値をどのように伝えていくべきかについて率直な意見交換が行われました。精神医学は診察室の中だけで完結するものではなく、地域や社会とのつながりの中で発展していく学問であることを、多くの参加者と共有できたように思います。

大会の準備を進める中で、私自身も精神医学の裾野の広さを改めて実感しました。精神科医療は、病気だけを診るのではなく、その人の人生や家族、学校や職場、地域社会を理解し、ともに歩む営みです。人口減少やデジタル化、価値観の変化が急速に進む現代において、精神医学もまた社会とともに変化し続けなければなりません。会長講演では、「脳だけではなく、物語を持ち、社会の中で生きる人を理解する精神医学」という視点から、これからの精神医療の方向性について私なりの考えをお話しました。

今回の学術総会は、多くの職員が日常診療を支えながら、それぞれの立場で準備・運営に携わってくれたことで初めて実現しました。一年以上にわたる準備を通して、全国の多くの精神科医と関係者と意見を交わす機会を得ました。その過程で、精神医学が直面する課題は施設や地域を超えて共通しており、一方で地域ごとの創意工夫や実践から学ぶことも数多くありました。この経験は、一人ひとりにとって貴重な財産であると同時に、あさかホスピタルグループにとっても大きな財産になったと感じています。学会で得られた知見や新たなつながりを、診療、教育、研究、そして地域への貢献へと着実に還元していくことが、私たちの次の使命です。

この経験で得られた学びと新たなつながりを力に、あさかホスピタルグループはこれからも地域とともに歩み、「社会の中の精神医療」の実践を通して、誰もが安心して暮らせる地域づくりに貢献してまいります。

JPSC-AD研究の10年:日本発の大規模認知症コホート研究の軌跡と未来

認知症研究の先にある健康長寿:

JPSC-AD/Arakawa Geriatric Cohort Studyが示す老年期の心理社会的基盤

慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室 喜田 恒
社会医療法人あさかホスピタル 診療部 地域診療部長

JPSC-AD研究(Japan Prospective Studies Collaboration for Aging and Dementia)は、全国8地区、約1万人規模の縦断コホートを構築し、この10年間、認知症とつづきの危険因子・防衛因子の解明を目指して、疫学、神経心理学、脳画像解析、バイオマーカー研究を融合した我が国を代表する研究基盤へと発展してきた。

慶應義塾大学からは、その一環として東京都荒川区で実施しているコホートの知見をもとに、認知症研究の先にある「健康長寿」の実現に向けた心理社会的基盤について報告した。従来の認知症研究は認知機能や脳構造、生物学的マーカーを中心に進展してきたが、超高齢社会では、認知機能や身体機能を維持することに加え、高い主観的

幸福感や人生満足度を保ちながら生きる要因を明らかにすることが重要である。地域在住高齢者を対象とした解析では、85歳以上では自我の統合や外向性・誠実性といったパーソナリティ特性が人生満足度と関連し、95歳以上では老年的超越がより強く関連することが示された。これらの知見は、超高齢期には幸福感を支える心理的基盤が質的に変化する可能性を示すとともに、加齢を心身機能の低下だけでなく、価値観や人生観の成熟という発達の側面から捉える重要性を示している。本研究は、JPSC-ADが蓄積してきた認知症研究を心理社会的側面へと発展させ、超高齢社会における精神的健康やQOL向上に資する新たな研究の方向性を示すものである。



社会医療法人あさかホスピタル 診療部 児童思春期診療部長 佐久間 睦貴

第122回日本精神神経学会学術総会において、シンポジウム60「精神科医療は子どもの居場所づくりに何ができるのか？」に参加し、発表と司会を担当いたしました。

本シンポジウムでは、シンポジストとしては、静岡県浜松市で乳幼児期からの療育、園巡回、適応指導教室、オンラインの活用などを通じ、地域そのものを「いるだけで良くなる居場所」とする支援に取り組まれているメンタルクリニック・タタの大嶋正浩先生、香川県で外来、大規模デイケア、病棟、院内学級、ホースセラピー等を通じて子どもたちの生活を支えておられるこの医療センター五色台の佐藤仁先生、SNSやオンラインの居場所について、

子どもたちが何を求めているのかを大人が丁寧に探索することの重要性をお話しくださった愛知県西三河福祉相談センターの吉川徹先生に、それぞれで登壇いただきました。また、司会に児童精神科臨床の第一線で長く活躍されている駒木野病院の笠原麻里先生をお迎えしました。

私は、あさかホスピタルにおける児童精神科病棟、デイケア、フリースクール、子ども食堂など、地域の中で子どもたちの居場所をつくる取り組みについて紹介しました。

不登校、孤立、虐待、発達特性など、子どもたちの困難は多様化しており、社会全体で子どもを支えきれない場面も少なくありません。子どもにとつての居場所は、単なる場所ではなく、「ここにいてよい」と感じられる関係性の中に生まれるものです。今回の議論を通じて特に印象的だったのは、子どもが喜怒哀楽を表し、ぐずったり、不安定になったりしても、それを受け止めてもらえる経験こそが、子ども時代に育まれてほしい大切な基盤であるということです。

精神科医療は、病院の中だけで完結するものではありません。家庭、学校、福祉、地域とつながりながら、子どもや家族を支える地域での居場所づくりの大切さを改めて感じる機会となりました。



第122回日本精神神経学会学術総会事務局長の任を終えて

社会医療法人あさかホスピタル 診療部 地域診療部長 喜田 恒

昨年4月、私が研修医時代からご指導いただき、自宅もご近所である水野雅文先生を当院院長にお迎えいたしました。その大きなミッシンの一つが、第122回日本精神神経学会学術総会の開催であり、私は水野先生のご指名を受け、事務局長を拝命いたしました。日本精神神経学会は会員数2万人を超える本邦最大の精神科関連学会であり、その学術総会は大学精神科の教授が会長、准教授が事務局長を務めることが通例です。そのような中、地方の民間精神科病院である当院が主催を担うことは、

長い歴史の中でも前例のない挑戦でした。

水野先生の力強いご指導のもと、あさかホスピタルらしさを随所に感じていたいただける学会となるよう様々な提案をさせていただきました。その実現にあたっては、佐久間先生をはじめ医局の先生方、各部署の皆様、出身医局である慶應義塾大学ならびに同社会精神医学研究会さらには東邦大学の先生方からも惜しみないご支援とご協力を賜りました。皆様のお力添えにより、無事に学術総会を終えることができました。

私自身も三つのシンポジウムで演者を務めるとともに、一つの講演では座長を担当し、ウェルカムパーティーと懇親会の司会も務め、その準備期間は責任の重さに身の引き締まる思いの連続でしたが、振り返れば三日間はあつという間に過ぎ、大変貴重で得難い経験となりました。この場をお借りして、ご尽力いただいたすべての皆様に心より御礼申し上げます。



この経験を今後の臨床・研究・人材育成へと還元するとともに、私が理想とする「地域・社会と精神医療の共生」の実現に向け、一層精進してまいります。誠にありがとうございました。

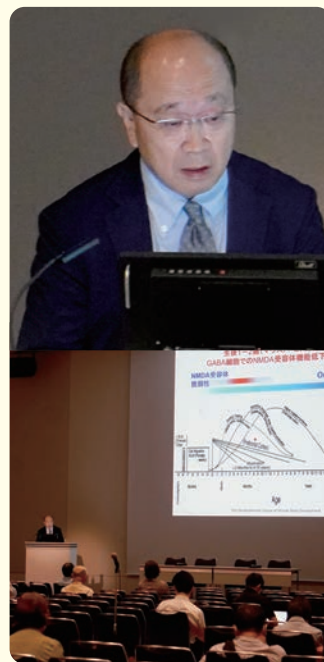
社会医療法人あさかホスピタル 診療部 中沢 一俊

去る6月18〜20日に、日本精神神経学会学術総会の第122回大会が横浜で開催されました。特筆すべきは、今大会が大学医局ではなく当院の主催であったことです。水野院長が大会長、喜田先生が事務局長を務められ、3日間で約1万人の参加者があり、あさかホスピタルの名を全国に知らしめました。院内からも多くの発表があり、小生も「統合失調症—NMDA受容体仮説から見た基礎と臨床の接点」のタイトルで、教育講演をする機会を頂きました。

私は、2022年10月にあさかホスピタルに入職するまで、米国アラバマ州バーミングハムにあるUniversity of Alabama at Birmingham (UAB)で統合失調症の基礎研究に携わっていました。幻覚妄想や思路障害などを起こす統合失調症の病態生理のメカニズムは未解明です。しかし近年はNMDA受容体(NMDAR)と、神経伝達物質グルタミン酸の受容体たんぱく質の機能低下が有力な仮説の一つになっています。私の研究室では、大脳皮質や海馬の中でも盛んに発火活動をする

して投射先の錐体細胞の発火を精緻に抑制する、バルブアルブミン(PV)細胞というGABA放出細胞とNMDAR機能低下が起きている、との仮説を立てました。それを検証するために、NMDAR遺伝子が脳皮質や海馬のPV細胞でノックアウト(KO)されるマウスを作成し、その病態生理を調べました。結果は、ドーパミン放出異常やガンマーオキシレーションの障害など、ヒト統合失調症に特徴的な病態生理が、作成したマウスで再現されました。逆にKOを同じ細胞で思春期以降に誘導しても異常は見られず、出生前後のNMDAR異常が重要なことも示唆されました。

以上が私の教育講演の要旨です。1995年に米国MITに留学して、2005年頃にNIH(米国立精神衛生研究所)でモデルマウス作成して、さらにUABでの解析まで17年かかり、2022年に帰国した時は、浦島太郎のような気分でした。そんな時代錯誤的な自分を受け入れて下さった理事長先生を始め、あさかホスピタルの皆様に感謝申し上げます。



統合失調症-NMDA 受容体仮説からみた基礎と臨床の接点



機能評価ツール『Cognitive Assessment Interview(CAI)』ワークショップ 概説と面接実践

社会医療法人あさかホスピタル 診療部 竹内 一真

第122回日本精神神経学会学術総会において、「機能評価ツール『Cognitive Assessment Interview(CAI)』ワークショップ：概説と面接実践」の運営に携わりました。CAIとは統合失調症の患者さんに見られる認知機能低下が日常生活にどのような影響を及ぼしているかを半構造化面接によって評価する手法です。本ワークショップの開催にあたっては、サブコーディネーターの小野田太郎先生が事前準備から当日の運営まで多大なご尽力をされました。当日はCAIの開発者であるUCLAのJoseph Ventura先生をお招きし、実際の面接映像を用いて参加者が評価した後、Ventura先生から直接解説をいただきました。開発者ならではの丁寧な解説により、認知機能評価への理解が一層深まったものと感じています。今後も統合失調症の認



知機能に関する研究を継続し、その成果を患者さんへのより良い治療や支援として還元していきたいと考えています。最後に、今回このような機会をくださった大会長の水野先生、ご指導いただいた根本先生、内野先生、小野田先生、そして佐久間啓先生をはじめとするあさかホスピタルの皆様深く感謝申し上げます。

精神科訪問看護における多職種連携の実践と課題

社会医療法人あさかホスピタル看護部 ゼネラルマネージャー 河野 千秋

私は、会長企画シンポジウム「精神科訪問看護における多職種連携の実践と課題」において、精神科訪問看護の教育体制の課題や、多様化する精神科訪問看護における課題について発表しました。

精神科訪問看護に必要な教育として、病棟の統制型看護から主体性を尊重する伴走型支援への転換、在宅アセスメント力が求められる。訪問看護場面での統合型地域精神科治療プログラム(OTC)の活用ができるよう、教育を進めていく予定です。

出同行などの支援は診療報酬で十分に評価されていません。児童思春期の精神科訪問看護においては、従来の精神科訪問看護は成人期の症状安定や生活リズム維持を中心に構築されてきたため、発達段階やアイデンティティ形成を重視する児童思春期支援とは大きなギャップがあります。発達学的視点を持つ看護師の不足、専門研修の乏しさが参入を難しくし、さらに家族支援や多機関連携に要する時間は診療報酬で十分に評価されていません。



ウェル訪問看護ステーション
・精神科病院併設 24時間対応
・精神科医療に特化(9割が精神疾患)
・月平均訪問数 約1,100件



会長企画展示「クリップタイム」 精神医学とアートの重なりから見えたもの

はじまりの美術館 館長 岡部 兼芳

第122回日本精神神経学会学術総会において、会長企画展示「クリップタイム」を開催しました。本展は、効率や速さを重視する現代社会の時間軸を、障害のある方の身体感覚や生活の実態に合わせて再考する試みです。会場では、多様な時間のあり方を肯定的・創造的に捉え直す作家として、笹山勝美さん、似里力さん、藤本正人さんから3名の表現を紹介しました。

会期中、精神医学の学術的・臨床的知見が、個人の診療に留まらず、社会を変える力を持つことを、いくつかの講演や議論から強く実感しました。特に、リカバリーに向けた「アスピレーション」や「Will」をつた、よりよく生きるためのポジティブな意思を原動力とするアプローチは、社会全体に应用できるとしても重要な視点だと考えます。

こうした見えない意思を引き出したり、物事の見方を変えたりする「アート」や、人間の試行錯誤の結晶である「文化」もまた、現在の社会を構成する重要な要素です。精神医学も文化・芸術も、人間の内面に深く関わり、数値化が難しいという点で、その社会的効果を評価づけることは容易ではありません。しかしだからこそ、社会を根本からより良く変えうる可能性を共有していると考えます。私たちの社会を違う角度から捉える両者が連携し、互いに補完し合うことで、誰もが生きやすい社会へと向かう大きな希望を感じました。

今後、このような領域や分野を横断した連携のきっかけづくりを大切にし、みなさまとともに、誰もがよりよく生きることのできる社会を手探りしていきたいと思っています。

笹山 勝美
《どうぞ》2004年～



似里 力
《無題(糸玉)》2008年～



藤本 正人
《Negative capability -くつろいでいられる能力-》
1985年～



創立63周年 あさかホスピタルグループ記念講演会 2026年3月13日

こころの薬を科学する～精神科薬物療法の最適化を目指して～

福島県立医科大学医学部 神経精神医学講座 教授 三浦 至先生

あさかホスピタルグループ記念講演会を講師に三浦至先生（福島県立医科大学医学部神経精神医学講座教授）をお迎えして「こころの薬を科学する」精神科薬物療法の最適化を目指して」をテーマにご講演いただきました。

講演では、経験則に依存しがちであった精神科薬物療法を、EDM（根拠に基づく医療）に基づいて標準化・最適化していく重要性が示されました。一方では、エビデンスを画的に適用するのではなく、TDM（治療薬物モニタリング）や薬物相互作用（DDI）の管理と、患者・家族が治療方針の決定に参加するSDM（共同意思決定）やDDI（患者・家族参画）を組み合わせた個別化医療の必要性についても説明いただきました。

また、最新の診療ガイドラインや研究成果を踏まえ、精神科医療の最適化には①TDMの徹底、②薬物相互作用管理の強化、③エビデンスが十分に適用できない難症例への適切な対応が重要であることが示され、特にリチウムやクロザピンにおける血中濃度管理の有用性、電子カルテやデータベースを活用した薬物相互作用の安全管理の重要性について説明いただきました。

さらに、AIを活用した文献レビュー支援や、バイオマーカーと機械学習による治療反応予測研究など、精神医療の発展に向けた最新の取り組みも紹介されました。

本講演を通じて、科学的根拠に基づく医療と患者参画を両立させた精神科医療の実践が、今後ますます重要になることを学ぶ貴重な機会となりました。

大泉病院におけるアウトリーチ事業の展開と実践について

2026年3月18日

医療法人財団厚生協会大泉病院 木崎 英介先生



令和8年3月18日、大泉病院の木崎英介先生をお招きし、「大泉病院におけるアウトリーチ事業の展開と実践について」ご講演をいただきました。

大泉病院は東京都練馬区に位置し、サテライトクリニックや訪問看護ステーションなどの地域ネットワークを整備しながら、病床削減を進め、地域移行を推進してきた精神科病院で、先生は精神療法を専門とされ、近年は訪問診療を中心とした地域支援に積極的に取り組まれています。

講演では、アウトリーチ事業の目的や実際の運営について、具体的な症例を交えて分かりやすくご説明いただきました。アウトリーチとは、医療機関が外へ外向き、治療契約の有無にかかわらず支援を行い、医療への接続と本人の受療行動の自立を目指す取り組みです。長期入院患者の地域定着支援だけでなく、未治療者や治療中断者、ひきこもり状態にある方への支援など、地域精神医療における重要な役割を担っています。

また、専従チームと病棟医が連携し、行政機関や家族との協働のもと慎重に介入を進めていることや、収益面では厳しい状況にありながらも病院全体の機能向上に貢献していることが紹介されました。

最後に、アウトリーチは「おせっかい」と「支配」の境界にある支援であり、本人の意思や個性性を尊重する姿勢が重要であると話されました。参加者にとって、精神科アウトリーチの意義と課題、地域精神医療における医療機関の役割について理解を深める貴重な機会となりました。

Cognitive impairment and rehabilitation in schizophrenia Today.

Joseph Ventura, Ph.D.UCLA

2026年6月22日



6月22日、あさかホスピタルにてジョセフ・ベンチュラ先生による「UCLAで実践されている多職種連携による包括的な精神保健ケアと認知機能リハビリテーション」に関する講演を開催しました。

講演では、統合失調症の治療において薬物療法だけでなく、認知機能や社会認知機能の改善を目指した支援の重要性について説明された。特に、神経可塑性を活用した認知機能リハビリテーションや、メモや日課表を活用する代償的アプローチの有効性が紹介されました。また、BrainHQなどのコンピュータ支援トレーニングや学習した内容を実生活に結び付けるブリッジンググループの実践についても具体例を交えて説明していただきました。

さらに、回復支援にはSMARTゴールを用いた具体的な目標設定や、テクノロジーを活用した目標管理が効果的であることが示され、就労支援、有酸素運動、ピアサポートも回復促進に重要な要素として紹介されました。特に当事者によるピアサポートは、希望やエンパワーメントをもたらす支援として高く評価されていました。

質疑応答では、協調的専門ケア（SOC）モデルを通じて患者・家族を含む共同意思決定と、多職種チームによる継続的な支援の重要性が話されました。日本では医療・福祉サービスの縦割り構造が課題となっており、行政レベルでの連携強化や、治療中断者に対する体系的な追跡支援の必要性についても議論されました。

今回の講演を通して、患者さんの生活の質や社会参加を支えるためには、多職種が連携し、地域全体で包括的な支援体制を構築することの重要性を学ぶことができました。

SIRS 2026でのポスター発表を終えて

社会医療法人あさかホスピタル 診療部 児童思春期診療部長 佐久間 睦貴

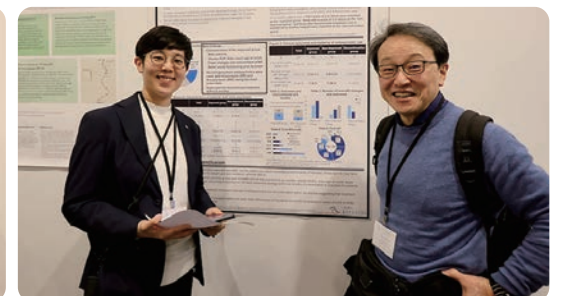


2026年3月イタリア・フィレンツェで開催されたSchizophrenia International Research Society (SIRS) Annual Congress 2026に参加し、児童思春期発症統合失調症の患者さんに対する薬物治療の実態についてポスター発表を行いました。

児童思春期に統合失調症を発症すると、学業、対人関係、家庭生活などに大きな影響を及ぼすことがあり、早期から継続的な支援が必要となります。一方で、児童思春期年代では薬の効果だけでなく、服薬の継続に関わる副作用や、ご家族の理解などを含めた心理社会的支援がより一層求められます。

本研究では、当院を受診した児童思春期の早期精神障害の患者さんを対象に、初回に選択された抗精神病薬、薬剤変更、併用の状況、6か月・12か月時点での臨床経過について診療録をもとに精査・検討いたしました。結果として、早期の症状の改善がその後の転帰と関連する可能性や、治療初期の中断を防ぐ支援の重要性が示唆されました。

海外の先生方との意見交換を通じて、日本の児童思春期精神科医療の実践を国際的な視点から捉え直す貴重な機会となりました。今後も日々の臨床から得られる貴重な知見を丁寧に整理し、子どもたちにより良い治療を届けられるよう研究と実践を重ねていきたいと考えています。



あさかホスピタルグループにおける介護施設のICT化・介護DX化について

介護老人保健施設啓寿園 マネージャー 今村 剛久

社会福祉法人安積福祉会
ベッコントロール室 マネージャー 吉川 直人



啓寿園ではあさかホスピタルの電子カルテ導入に伴い、2004年に電子カルテが導入され、介護記録が電子化されていました。コロナ禍には施設内Wi-Fiの導入、iPadを使用しオンライン会議やオンライン面会を実施してきました。2024年4月からは生産性向上委員会を立ち上げ、生産性向上ガイドラインを用いて介護の質の向上を目指し、介護職員の業務負担を軽減する検討を始めました。導入するテクノロジーについて事前にスタッフアンケートを実施し、希望のあった製品を導入しました。

1位はミストシャワー浴、2位は見守り介護ロボットaams、3位はスマートフォン、インカムでした。2024年には試行的に見守り介護ロボットaams 23台とタブレット・スマートフォンの導入を行いました。1年ほど

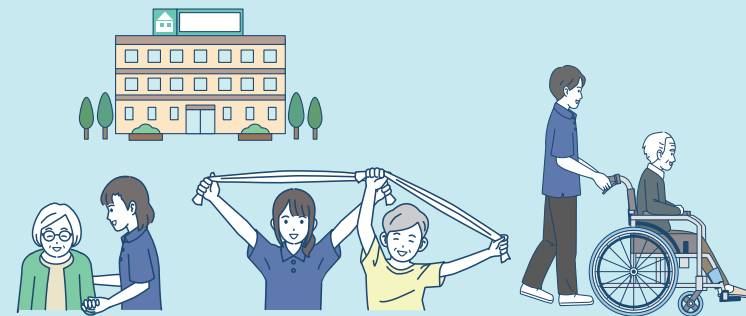
また、入浴介助の効率化のため、従来のチェアインバスに代わり、シャワー入浴装置（ミスト浴）を導入。利用者の快適性向上とともに、介護職員の身体的負担軽減にもつながっています。本宮地区の特別養護老人ホームしらかわ有寿園とカーサ・コミュニティでも、令和7年度の「ふくしま介護テクノロジー導入モデル事業」の採択を受け、介護ソフト更新とスマートフォン・インカムによる音声入力を導入しました。記録業務の省力化により、職員が利用者に向き合う時間が増え、ケアの質の向上にもつながっています。



社会福祉法人安積福祉会では、介護人材不足への対応や業務負担軽減を目的に、介護現場における「ICT・介護テクノロジー」の導入を積極的に進めています。特別養護老人ホームカーサ・ミツレでは、令和7年度に福島県の補助金を活用し、介護記録ソフト「ケアカルテ」を導入しました。ナースコールや見守り機器である眠りSCANと連携することで、利用者情報の一元管理を実現しています。さらに、スマートフォンとインカムを活用した音声入力により、介護記録作業の効率化を図り、職員の業務負担軽減につなげています。

本事業の成果報告会において導入事例を発表しました。補助金申請から介護現場の課題の抽出、機器の選定、現場への定着までの過程や、実際の活用効果について報告し、県内介護施設における先進的なモデルケースとして紹介されました。高齢者施設においては、今後さらに人材不足への対応や介護現場の業務効率化が求められる中、「ICTや介護テクノロジー」の活用はますます重要になると考えられています。今後も安積福祉会では、介護テクノロジーを効果的に活用しながら、利用者一人ひとりに寄り添った質の高いケアの実現と、職員が安心していきいきと働ける職場環境の整備を進めてまいります。

介護DX推進、質の向上、働きやすい環境づくり



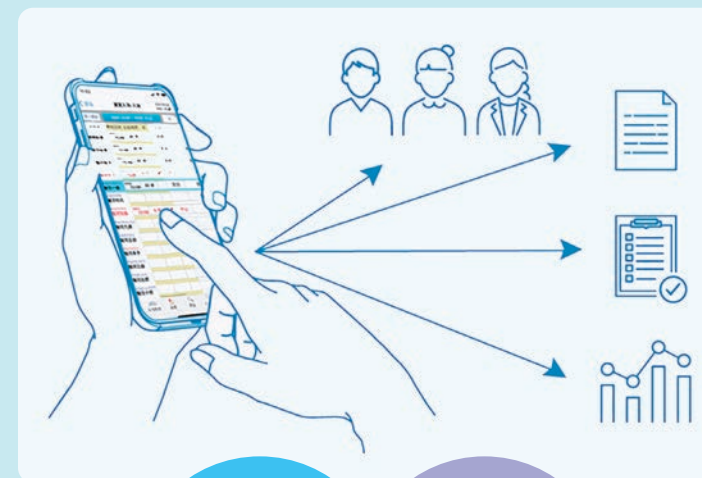
ICT導入後の効果について

「記録」入力の時間が短縮
利用者に向き合う時間が増えた。
「見える化」で、情報共有の一元化、属人的ではないケア体制

全ての職員がスマホ・タブレットでその場で情報を確認できる。担当職員しか分からなかった情報が「誰でも見られる」・「引き継ぎが可能」に。また、紙・印刷・帳票にかかるコストも削減。
年休取得率向上・業務時間削減



多種多様なICT機器と連携して一元管理が可能！
ナースコールやベッドセンサー、見守り機器など多種多様なICT機器と連携。利用者さんのケース記録として一元管理することができます。



モバイルは簡単なタッチ操作で記録入力！

入力した記録を送信すると、すぐに全員に共有されます。記録を元に自動でチェックシートや温度板、連絡ノートを作成できるから記録残業時間は「0」に！

深刻な人材不足（働く人の減少）への対応
介護業界の高い離職率への対応
業務の「標準化」・「効率化」・「省力化」

職員の負担軽減
介護の質の向上
生産性の向上





あなたの「働きたい」に耳を傾け、 その先もずっと伴走します。 ～就労選択支援・就労定着支援のご案内～



認定NPO法人アイ・キャン 多機能型支援事業所コラッジョ 管理者 和里 恵子

多機能型支援事業所コラッジョでは、就労選択支援・就労移行支援・就労継続支援B型・就労定着支援の4つの就労系サービスを提供し、シームレスな支援体制を整えています。多様な個性のニーズに合ったプランを策定し、企業実習や学びのプログラムを組み合わせることで、「自分らしく働くこと・生活すること」を包括的に支援しています。今回は昨年からのスタートした2つのサービスを紹介します。

就労選択支援は2025年10月から開始したサービスです。「どんな仕事に向いているのか」「どんな働き方なら続けられるのか」「そんな迷いや不安を、支援者と一緒に整理しながら、自分に合った働き方やサービスを考えていきます。『評価する場』ではなく、『自分の可能性を整理する場』としてご利用いただけます。

就労定着支援は、就職後の職場適応を継続的にサポートするサービスです。定期面談や職場・家族との連絡調整を通じて問題を早期にキャッチし、必要に応じて勤務時間や業務内容の見直しを企業へ働きかけます。

コラッジョでは、あさかホスピタルグループの強みを生かした医療と福祉の包括的な支援のもと、行政・企業・教育との連携を深め、地域に根付いた充実した就労支援の展開を目指しています。

グループホーム ラガッツィ、若者の自立を目指したあらたな取組

認定NPO法人アイ・キャン 共同生活援助事業ピータ 管理者 梁取 夕季



2025年末、共同生活援助ピータに新しいグループホーム「ラガッツィ（ragazzi）」が加わりました。ワンルームアパートタイプの棟で、2階建ての建物に10名が入居でき、一人暮らしに向けた練習ができる環境です。「ラガッツィ」はイタリア語で「若者たち」を意味します。

ここでは、3年以内の一人暮らしを目標に、スタッフによる集中的な自立支援を受けながら、日々の生活を通して実践的な練習に取り組んでいます。緊急時の対応は

もちろん、金銭管理、家事、各種手続きなどについても、一人ひとりの課題に応じた支援を受けながら、地域での生活を送っています。

入居者の方々からは、「いい機会だと思ってチャレンジしました」「すぐに相談できるスタッフがいるので、安心して生活できます」「ここに來られて良かった」といった声が寄せられています。



私たちが取り組んできた、6つの事業



給食・配食事業部
Food service

高齢者の方や入院の患者さま、保育園に通うお子さんたち。一人ひとりの生活環境にあわせた最適な食事を日々提供しています。「美味しい!」と思わず笑顔になっていただく瞬間が私たちの原動力です。



Kふぁーむ・共生事業部
Symbiosis service

Kふぁーむでは、「働く」・「学ぶ」・「食」・「農業」など様々なキーワードを通して、障がいや大人、子どもに関係なく、すべての人々が集い、繋がりを感じられることを目的とした「共生事業」を実践しています。



レストランサービス事業部
Restaurant service

院内カフェや職員食堂、パン工場の運営を支援しています。食を通してたくさんの笑顔を作れるよう、人と街をつなぐ橋渡し役になるためのお店作りを心がけています。



メンタルヘルス事業部
Mental health

サービスを提供する働く従業員や組織のことを本気で想い、専門的な知識や技術でその人たちのパフォーマンスや心の健康を守っていくこと。それが私たちの使命です。



事務・経営企画部
Management

医療や福祉における患者さまご利用者さま、またそのご家族さまに心あたたまるサービスをお届けするため、日々研鑽を積み、改善できることや、さらにお客さまのニーズにお応えできないか検討を重ねています。



メディカルサービス事業部
Medical service

コンビニの運営をはじめ、福祉用具リース・保険業務・私物クリーニング・清掃委託を行ってきました。患者さまや病院スタッフに限らず、地域の皆さまのニーズにお応えし、お客さまの立場に立ったサービスを心がけています。

年表

有限会社アサカサービスセンター

設立以前……院内売店として営業
昭和47年……福島オーナース牧場 開設
昭和51年……(株)アサカサービスセンターとして設立(郡山市桑野)
医療法人安積保美園の売店、病院給食食料納入事業を展開
不動産管理損害保険代理店として営業開始
昭和56年……事務所移転(郡山市朝日町)
平成3年……事務所移転(安積町)
福島オーナース牧場 閉鎖
平成18年5月……会社法に伴い 有限会社アサカサービスセンターに商号変更
平成19年……Kふぁーむ 運営開始
平成20年……光の棟 竣工・給食センターターボ開設
従来の売店からYショップとしてリニューアルオープン
カフェ・チルコロ オープン
あさかストレスケアセンター開設
平成21年……カウンセリングルームComfort開設
平成22年……地域交流施設・農場レストランSAGRAが開設・営業開始
平成25年……農場レストラン トレンテピアノソとしてリニューアルオープン
Kふぁーむ内に太陽光のパネル設置工事開始
平成26年……あさかストレスケアセンター移転(郡山市朝日)
Kふぁーむにて太陽光発電事業「ふぁーむ・デル・ソーレ」開始
令和元年……シャルドネ369本定植
令和2年……レストラン パール・イルチェントロ オープン
メルロー210本・シャルドネ415本定植
令和4年……パール・イルチェントロからフォー・フォー・ノチェントロへ店名変更
令和5年……レストラン ピアットリニューアルオープン
令和6年……自社農場のブドウを使用したロゼワインの販売を開始
令和7年……温泉事業売却(廃止)
令和8年……50周年を迎える



おかげさまで、有限会社アサカサービスセンターは
50周年を迎えることができました。

「心に寄り添うサービスを」

本日、アサカサービスセンターが創立50周年という大きな節目を迎えられたことは、ひとえに利用いただいているお客様、地域の皆様、そして長きにわたり共に歩んでくれた職員一人ひとりの献身的な努力の賜物であり、深く感謝申し上げます。

63年前、父が精神科医療をスタートしたとき、大切にしたのは「愛情・奉仕・和・進歩」という志でした。

その志を今、医療の現場で形にするのが「あさかホスピタル」であり、その環境を支え、日々の営みを豊かにするのが「アサカサービスセンター」です。この両輪が揃ってこそ、私たちは質の高いケアを提供し続けることができました。

医療とサービス。役割は異なりますが、根底にある思いは一つです。それは、関わるすべての人に寄り添い、安心を提供することに他なりません。アサカサービスセンターが支える食、売店やカフェ、リースなどの療養環境、さらにはメンタルヘルスサービス、自然豊かな農場、そしてこれら多岐にわたる事業の運営に細やかな配慮があるからこそ、医療現場はより純粋に患者様の心と向き合うことができます。病院の小さな売店から出発したこの50年は、まさにその連携を磨き続けてきた歴史でもあります。

世界情勢は様々に変化し、食や医療介護福祉も大きな影響を受けていますが、今後も私たちが大切にしている「心の声に耳を澄ます」は変わることはありません。これから小さな声やニーズに耳を傾け、グループが一丸となり、地域に根差した、より信頼される存在であり続けたいと思います。

会長 佐久間 啓

「ささえる つなげる ひろがる」

謹んで創立50周年のご挨拶を申し上げます。

本日、アサカサービスセンターは創立50周年という記念すべき節目を迎えることができました。この半世紀の間、私たちを支えてくださったお客様、患者様、職員の皆様、地域の皆様、そして何より、現場で日々汗を流してくれている職員一人ひとりに、心より感謝と敬意を表します。

私たちアサカサービスセンターは、あさかホスピタルグループの一員として「医療を支える環境づくり」を担ってまいりました。最初は小さな歩みでしたが、時代の要請に応えるなかで、現在は「給食・食堂」「売店」「メンタルヘルス」「農場・太陽光」「リース・環境整備」「カフェ」という、病院運営やその理念/クレドに欠かせない6つの事業を柱とする組織へと成長いたしました。病院が提供する質の高い医療の背後には、安全・安心な環境、そして円滑な運営を支えるサービスが不可欠です。私たちは、患者様が安心して療養に専念でき、職員の皆様が一息つける「日常」を支えることに、強い誇りを持って取り組んでおります。振り返れば、苦勞の絶えない時期もありました。しかし、どのような時も「医療の質は環境も重要である」という考えのもと、現場で行うべきことに集中し、貫いてきたからこそ、今の私たちがいます。

時代は変わり、医療や福祉に求められるニーズも多様化していますが、私たちの原点は変わりません。それは、あさかホスピタルの掲げる「心の豊かさ」を共に追求していくことです。これまでの役割を大切にしながらも、グループ全体の価値を高めるパートナーであり続けたいと考えております。結びに、皆様のこれまでのご厚情に深く感謝申し上げますとともに、これからのアサカサービスセンターの挑戦に変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。私の挨拶とさせていただきます。

代表取締役社長 青木 瑠依子